

感想をお書きください。

本日はありがとうございました。

時間不足で消化不良のところがあります。

「使いながら学ぶ」ということは重要です。ただし、意味のあるタスクを行う中で表現が習得できるかどうかは、何とも言えません。現場を観察すると、生徒が単語や短い語句で返答するだけで、満足する教師が多すぎます。言い換えれば、表現文型に対する意識が高い教師が少なすぎます。漢字と語彙を覚えさせることに汲々としている教師が大半です。

「使いながら学ぶ」というやり方自体は、朝鮮や満州でも実践されていました。1930年代の日本語教科書はイラストが多用されています。最初の20時間分ぐらいはイラスト以外に何も文字は書かれていません。絵を見ながら、自己紹介をしたり、友人を紹介したり、身の回りのものや場所について音声によるやりとりをするようになっています。媒介語による説明ではありません。直接法によってやり取りしながら学ぶのです。2019年に文化庁が出した報告書では「コミュニケーションを通じてコミュニケーションを学ぶ」とありますが、それが戦前から実践されていました。当時としては世界的に最先端の日本語指導が行われていました。そのやり方が戦後全て失われ、オーディオリングルによって反復練習を行いながら、言語知識を覚え、それから使うというように教授法が後退してしまいました。残念なことです。

ブルームのタキソノミーは言語教育を考えるときに重要です。そこにどのような表現を使用するかを整理する必要があります。

学習言語指導を段階的に行うには、まず数量や場所の表現から始めます。生活言語では「～は～です」でも言えますが、それを「～は～から～離れた所にある／行ったところにある」などと言えるようにし、さらに高度な表現へと導いていかなければなりません。それができるようになれば、累加、対比、比較、程度などの表現へ、最終的に論理的な日本語が使えるようにするには原因・理由、条件、逆接などへレベルを上げていきます。分析・評価ということと表現文型を結びつけて教師が指導できないと、生徒の日本語力は伸びません。

これによって意見を論理的に言えるようになれば、多くの教科指導は足りるかもしれませんが、国語になると、これではまだ不足です。社会科や理科の試験で点を取れるようになっても生徒はなかなか国語で点を取れません。

感情や感覚など微妙な情意を伝えられるようになるには高度な日本語指導力が求められます。カギを握るのは発問力です。多くの教員が日本語指導で行っているのはFact Finding Questionであり、これでは日本語力を育てられません。

日本語指導は文法を理解させ、漢字・語彙を覚えさせることではない、教科知識を理解させてもまだ足りないのだという意識を教諭が持てるようになることが必要だと考えています。

留学生の日本語指導でも、教科書は覚える必要がないと言って指導しています。

重要なのは表現指導です。考えたこと、感じたことを言語化できなければ、意味がありません。

言語教育は技能教育であり、用具教科です。このことを理解していない教諭がダブルリミテッドの生徒を増やしています。

本日はお時間賜りありがとうございました。限られた時間内で問いをまとめるというグループ学習に参加した学習者の気持ちでした。とはいえ、事前にあれだけ講師の著書（連載）を読むこと（当たり前のことです！）のお願い、また、開かれた問いとして帰納させていくためのプロセスにしたいというお題が直前にあったように理解したのですが…。私のグループでは、連載未読の人が1人、そのうえ自らのお悩み相談を開陳、そしてお悩みに上から答えることでマウントに終始する人1人…。さっぱり納得いかず、なんだかとても残念な気持ちになりました。「先生のテキストの内容に戻りませんか」と言ってもなかなか通じない。

多文化共生においてはまさにこれと同じような状況、過程が起きうるのだと自戒したいのですが、先生の論を深掘りすることが少しもできなかったという点で落胆しております。次回に期待します！

外国にルーツのある子どもたちに日本語を教えている者として、今日の寺子屋には関心を持って参加しました。事前に読んだ南浦さんのコラムにも具体的な方法論が記されており、大変有益な集いだったと思います。

全体的な印象として、南浦さんは学校の常勤教員の視点から実践や改革の話をなさっている感じを受けました。ただ、私のように外部講師として日本語教育に携わっている者からすると、学校側の「お任せ主義」がとても気になります。私の方から学校ぐるみの取り組みを求めていっても、先方に問題意識がないのか、あるいは多忙で余裕がないのか、はかばかしい反応が返ってきません。この壁を打ち破りたいと思い試行錯誤しているのですが、残念ながらあまり効果がないのが現状です。

その意味で、グループ討議の時間に同じ立場にある方と突っ込んだ話ができたのは力になりました。「困った経験を言い合うだけでは仕方がない」という考え方もありまじょうが、私はそうは思いません。どのみち懸案解決の即効薬はないと思料されるので、「自分と同じ思いをしている人が全国にいる」と知るだけでも、やる気が出て来るからです。

いろいろなことを考えた、まさに寺子屋の名にふさわしい集いでした。南浦さん、嶋田先生、出席者の皆さんにお礼申し上げます。

授業や教師について考えるより実はカリキュラムが重要であるというお話を聞いて、私が携わっている教育機関の教員たちの、言語化されていないけど各々が抱えているモヤモヤの原因がわかった気がしました。

また、雰囲気づくりのコツとしてただ見せ場をつくるというより「カッコいいところを見せる」というお話を聞いて、それぞれの得意なところに光をあてるようなきっかけづくりをしたいと思います。

短い時間でいろいろなお話を伺うことができ、とても勉強になりました。ありがとうございました。

日本語教師が、日本語教育業界の通念を拭き去って、学校教育の世界に一步を踏み入れる。踏み入る仕組みがなければ、その方法を探す。なんでもいい。そこで、虚心坦懐にゼロベースで回りを観察し、さてさて、どうしようかいなあ、って、ゆ〜〜〜っくり考えることが必要なのだと思いました。

私はこれから児童・生徒への日本語サポートをしてみたいと思い今回の寺子屋に参加させていただきましたが、現状、一日本語教師の存在がとても小さいものなのだ（周辺情報からも同様の意見を聞いていましたが、やっぱりそうか！）というのが第一の感想です。

但し、一日本語教師が動かなければ、程度の差こそあれ、外国（日本）に来て困っているであろう児童・生徒のサポートができないこととなります。

諸々の壁があることを前提で私の今後の方針は変えずに進むことにしようという覚悟を決めました。

そして、児童・生徒のサポートができる環境が整った際は、今回の寺子屋で得た情報などをもとに、少しずつ学校内での存在感を高める行動が取れるよう準備しておきたいと思います。

貴重なご経験・ご意見を伺うことができました。

ありがとうございました。

親の仕事で一緒に来た子供の日本語レッスンをしたことはありますが、私が担当していた子供たちは、インターナショナルスクールに通っていたので、教科の学習で問題になることはありませんでした。

教科学習につなげる方法、何をどう扱うかは子供ひとりひとりみな違うなどの問題点があることは想像はできますが、経験がない分、問いを考えるのは難しく感じました。

今回一緒にルームになった方に実際にNPO法人でいくつかの学校の外国由来のお子さんの日本語指導をされている方がいらっしゃいましたので、その方の経験、問題点を聞きながら、対話をしました。

先生のお考えを聞いて、先生の視野がとても大きいと感じました。また、教育に関する視点、重要と考えることのとらえ方について、改めて考えさせられました。

「どう授業についていかせるか」だけに囚われがちですが、その子供にどういう風に成長してほしいのか、どんな子供になってほしいのか、そして、現段階でどの程度まで達成しているのかという視点でカリキュラムを作るというのが、何よりの気づきでした。日本語学校でも同じく「JLPTをとらせる」から「なにができるようになるのか」「どういう学生になってほしいのか（教育理念）」を重視してカリキュラムを作るように変わろうとしているの共通点があると感じました。

外国から労働者を迎え入れる以上、今後外国由来の子供は増えていくと思います。学校全体、地域社会全体を巻き込んでいくのはなかなか困難だとは思いますが。ただでさえ負担が多い学校教員にだけ強い負荷をかけることなく、少しでも良い方向に進めるために、日本語教員に何ができるのかを考える良い機会でした。

問いを考えるという方法がとてもよかったです。困りごとや混乱している状況が無目的に吐き出しそうになるところが、自分の中に思考のスペースができたように思いました。

それから教員免許についてもモヤモヤしていたのが、少し整理できたように思います。

バカロレアのプログラムの「すべての教師は言語の教師である」という理念を思い出しました。国語科だけでなく学校のカリキュラムそのものに要請されている内容や目標について考えていかなければいけないということ、これまで何となく国語科の内容について疑問に思っていたこと（言葉の使い手として熟達していくことがイメージしにくい。漢字をたくさん知っていればいわけではないのは理解できても、具体的に何ができるようになるのか、上手になるのかがつかみにくい）が重なっているようにも思いました。

<p>日本語教育が文科省管轄に入ったことを鑑みると、今後は教員免状についても外国人児童生徒等を扱う専門職を設けるべきだと考えています。日本の労働者不足を補うために特定技能制度、育成就労制度など各省庁は施策を進めていますが、すべてにおいて重要なのは人材育成だと考えます。これは日本人子弟や企業における人材育成も同様です。今まで潤沢にいた労働者が将来的（現在も）には獲得競争に勝たなければ、国際社会で勝ち残っていけない日本の現状を考えると、免状の名称や定義、その範囲は今後の検討としていいと考えますが、日本の教育行政自体の在り方自体が問い直されていると感じます。</p> <p>昨日の先生のお話で今まで一条校と言われる学校の先生はカリキュラムというものを意識してなかったというのがありました。私は非常に衝撃を受けて聞きました。確かに日本の小中学校などでは学習指導要領があり、それに沿って教育を行うことが求められ、ある意味、守らなければならない縛りになっているのだと思いますが、教員自身の中でどう工夫し、どうその教員らしさを培い、成長していくのか、南浦先生の言葉にある「教育文化」の中にそういう考えを持つ人がいない、生まれなかったのか、非情に驚きをもって聞きました。そういった意味では文科省管轄外にあった日本語教師の先生方は創意工夫を繰り返しながら、現在まで後進の道を作ってくれたのだと感謝を感じています。</p> <p>南浦先生は日本語の教員免除については教育の規制緩和につながると話していましたが、その点はよくわかりませんでした。日本語の先生であれ、国語、社会、算数、理科の先生であれ、教えるべき、育て培うべき能力目標があるのは同じで、その学校教育科目の中に「日本語」があるということではないのでしょうか。</p> <p>長々と申し訳ございません。非常に考えさせていただける寺子屋でした。ありがとうございました。</p>
<p>はじめての寺子屋参加でした。①真剣に熱い思いを持って実践されている方々と、このように出会って繋がれるのは幸せでした。②南浦さんから、How to よりも、とかその前に、大きな視点と理念をもつことの大切さを学びました。それは自分の経験を通すことと、ほかの方々の視点に触れることで醸成されると思いました。最後には、現場でできる一歩を見つけることができました。南浦さんから、子どもたちや同僚や人々ヘリスpektと愛を感じました。それは、私たちにとっても最も大切な柱ですね。③ブレイクアウトルームはなかなかエキサイティングでした。まず、時間がタイトな中、みなで協力すること。感想ではなく「問い」を立てることのおもしろさとむずかしさ。多少不十分でも前へ進むことで包括力が育つように思いました。・・・このような機会をいただき、ありがとうございました。</p>
<p>ずっと悩んでいたことについてお話しただけだったので、目の覚める思いでした。ありがとうございました。南浦先生の著作物をこれからも拝読させていただきます。外国ルーツの方への教育についていろんな人に関心を持っていただけるようにしていきたいと思います。</p>
<p>事前課題の資料や当日いただいた資料がとても有難かったです。</p> <p>また、グループで問いを出すための対話をしていて、問いを出すことの難しさを感じました。</p> <p>それぞれ注目している点や課題も異なり、児童生徒の日本語教育に関わるうえで、広い視野でさまざまな視点から見る必要があると思いました。</p> <p>南浦さんのお話から、熱い気持ちが伝わってきて、内容もちろんですが、今後自分がずっと現場で児童生徒と関わっていくうえで大切なものをいただいた気がします。今後もよろしくお願いたします。</p>
<p>学校の日本語支援には、学校側との相互理解と協力が必要であることが分かりました。日本語教師だけでなく、学校の担任の先生方にも見ていただきたい内容でした。2月から、お試しで小学校の日本語支援に入る予定ですが、①サバイバル日本語②日本語の基礎はできますが、③教科と日本語の問題を解決するためにも、学校側と連絡を密にしていきたいと思いました。カリキュラムの線上に日本語支援があることは自分でも考えていなかったの、気づきとなりました。</p>
<p>学校の現状がわかりました。学校の先生と日本語教師の関係、どのように日本語教師がかかっていったらいいかのヒントを得ました。またいただいた資料L2の教育として求められているもののシートで「使いながら学ぶ」いいと思いました。</p>
<p>本日は、ご多忙の中、貴重なお時間をいただきありがとうございました。日本語講師が何かをするというより、前提として、日本の学校運営やカリキュラムが、単一民族を前提として成り立ってきたものまなもので、我々日本も島国でなければ、自然と見た目や言語の違いを大きな違いには感じることなく、保護者も視覚化されない1人の個人にすぎないというインクルーシブ教育が全ての人に理解徹底されてくれば、排他的にはならないかもしれません。流れの中でどんな形であっても、語彙力いかなではなく、自己表現ができる場を作っていこうと思います。相手のできるところ、良いところを見ることが出来る力を学生と共に養い続けたいと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p>
<p>嶋田先生、南浦先生、Zoom寺子屋の開催ありがとうございました。</p> <p>現在、中学校で日本語支援に入っております。時には外国人生徒の支援を丸投げされることがあり、管理職に相談してはいましたが、少し困っていました。今回の南浦先生のおはなしで、それぞれの事情などがわかりました。</p> <p>その中で、学校の目標（目指すところ）に外国人児童生徒がのっているかというお話は印象深かったです。</p>

学校のカリキュラムの中に外国人児童・生徒に対する教育も位置付けなければならないという先生のお話が特に勉強になりました。子どもの支援に係わる人々の連携がうまく取れていないのも、学校のカリキュラムの中で学ぶ子どもの指導を協働で行っているという意識が欠けているためではないかと考えました。グルーptークの中で他県の現状も伺うことができ、集住・散在地域の別に関係なく、同じような課題を抱えていることもわかり、子供を取り巻く教育・支援のネットワークを確立することも早急に取り組むべきであると認識を新たにしました。

貴重な学びの機会をありがとうございました。南浦先生のお話を伺えるだけでなく、グループの皆様とそれぞれが抱える悩みや疑問等、様々な話をする事ができ、あっという間の濃い2時間でした。特に、子どもたちの「ゴール」のお話が大変印象的でした。「日本語指導」として捉えるのではなく「学校全体（あるいはもっと広い範囲）」で子どもたちの支援を考えていくことについて、今回改めて考えさせられました。どのように子どもたちそれぞれの持てる力を活かし評価していくのか、中長期的に学校全体で取り組んでいきたいと思ひます。

当日、仕事で遅れての参加となりましたが、BORの皆様のご厚意で考えを整理しやすく、話し合いにスムーズに加わる事ができました。これまで公的な学校現場での日本語教育経験はないのですが、(私が関わったのは、いずれも国外の日本人学校/インターに通学する児童)共通の資料をもとに話し合うルールが事前に設けられていたため、国内現場での経験を持つ同BORの方とも共通の軸や言葉で話す事ができ助かりました。南浦先生がお話になった「学校がどんな子供を育て、卒業させたいと考えているのか」。この目標(学校の考えのような)部分について、「外国ルーツの子供たちも包括した目標が立てられているのか」や、学校が地域社会の縮図としても機能するならば、外国ルーツの児童をも抱える学校としての「より共生的な部分を持った教育の場を実現しようと思ひ描いているのではないか」という考えに至りました。

今回の南浦先生のお話を伺いながら、自分自身は特殊学級の児童と自然に関わる環境がある小学校で過ごし、週初めの朝礼には一緒に並び、途中で立っていることを嫌がっても周りの児童達でなだめたり、助けたり、下校時にも当たり前に関わったりしていたのを思い出しました。その後、異なる市の学校に転校。全く異なる雰囲気的环境も経験しましたが、あれは、学校ごとの教育方針の違いだったのだと思ひ返す事ができました。

これから、自分自身が子供たちに関わる時、目の前の子どもを見つめる視点とともに、その周りを包む環境を持つ「どんな子どもを育てたいか」「どんな学校を作りたいか」を共有・理解する必要性に気づきました。複眼的に識る・見つめる視点関心の持ち方をもっと訓練したいです。

【問ひ】

・外国ルーツの子供たちの受け入れを決めた学校は、それまでの日本人だけの学校であった時と「どんな子供として卒業していつてほしいか」の部分で目標(意識)設定にどのような具体的な変化はあったのだろうか。

南浦先生の貴重なご講義を拝聴でき、大変ありがたく存じます。また、様々な方々と意見を交換する機会を得られたことも、非常に貴重な時間でした。

グループディスカッションでは、当初「どのように教科学習につなげていくか」という点が議論の中心となっていました。しかし、南浦先生のお話を伺う中で、次第に「教科学習に子どもを適応させる」のではなく、「教科学習を含むより広い概念としてカリキュラムを捉え、それをどう構築していくか」という視点が重要であることに気づかされました。

この視点を持つことで、学校側や担任の先生方も、日本語教師に任せきりにするのではなく、自ら関与すべきものとしてカリキュラムを捉えられるのではないかと新しい視点を獲得する事ができました。私は、そのためには、カリキュラムの作成に向けて、関係者からのフィードバックが欠かせないと考えます。

特に、日本語を担当している教師や保護者からのフィードバックは重要だと考えます。(子ども自身の意見も取り入れることが望ましいですが、子どもから率直な意見を引き出すことは容易ではありません。)日本語教師や保護者からのフィードバックを積極的に収集し、学校全体で考え、カリキュラムの作成につなげる事が重要であると考えます。

「言葉が違うこと」は一見大きな課題に思われがちですが、日本語教師や保護者からのフィードバックを通じて、単なる言語の問題にとどまらず、より本質的な課題や支援のあり方が見えてくるのではないかと考えます。

今回は、新たな視点から学校における外国にルーツをもつ子どもたちの教育について考える貴重な機会となりました。このような機会をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

南浦先生の多岐にわたるお話の中で、「制度による支援」、「日本語教育のスキルの活用」、「チームで活躍の場を作る」の3つのお話が心に残りました。

●制度による支援

外国につながる子供の教育現場でよく目にするのは、日本語教室の先生方が孤軍奮闘している姿です。ですが、先生のお話を伺い、日本語教室の課題は日本語教師だけに負わせるのではなく、学校全体の取り組みとして制度化することが大事だということに気づきました。制度化とは、学校全体のカリキュラムの中に、「日本語アプローチ」や「多言語・多文化アプローチ」を組み込み、目標設計することです。学校全体で外国籍の児童生徒を支援する体制を築くことで、教科担当の先生方との協働が生まれ、地域や保護者との連携も取りやすくなり、地域の中で子供たちを育てていく土壌ができると感じました。

●日本語教育のスキルの活用

日本語教育のスキルは、特別なものではなく、教科学習にも応用できるというお話も印象的でした。例えば、小学校低学年の授業において、教科の先生が分かりやすい言葉で話し、子どもたちの理解につなげているように、日本語教育の「視覚化」や「操作化」、「体験化」等の手法を、教科の授業に取り入れることで、外国籍の子供にとっても参加しやすい「言語に頼りすぎない」教科指導ができるということでした。

●チームで活躍の場を作る

「チームで子供が活躍する場を作る」という試みでは、ミンさんの放送委員のエピソードに心を打たれました。クラスメイトの応援や校長先生をはじめとする教員の温かい声掛けがミンさんをエンパワメントし、「チーム学校」として彼女に「勇気」と「自信」をもたらした実践です。ここで注目したいことは、「放送委員は別に流暢な日本語で話さなくてもいいという空気が生まれたこと」だと思います。多様な日本語を認めていくインクルーシブな教育の場づくりをしていくことも、教師としてとても大切なことだと感じました。

多様な背景を持つ子供たちが自分の能力を発揮できる場を学校全体で創出できるように「思考を活動化する」授業を今後も考えていきたいと思いました。

アクラス寺子屋では初めて南浦先生のお話をお聞きし、様々な方と出会いお話しすることができとてもいい経験をすることができました。実は自分の参加したグループでは事前に読んだ資料に問いを立てて話を進めることが上手くできませんでした。これまで参加した講座のように、経験を共有して解決策を問うという流れになってしまい、今後を考えていくうえで、自分の力不足も感じました。ボードで皆さんのグループの意見も知ることができ、とても参考になりました。ありがとうございます。

子どもの日本語教育に関して少しでも実情や課題を知りたいと思い参加しましたが、非常に刺激を受けました。勤務校の近くの小学校にも外国人児童が50名も在籍しており、校長先生からの要請を受け、留学生を連れて新入生の保護者の書類書きのサポートに伺ったことがあり、先生方や保護者の方々のご苦勞を少し知りました。地域の中で日本語学校にももっとできることがあると思いました。

寺子屋では、特に第3回の「はじめに言いたいことありき」の内容が一番ストンと来ました。サバイバル日本語から教科に繋げて行く過程に興味も持ちました。留学生も同じですが、日本語ができないからといって「人」としての存在価値が低いのではなく、子どもでも大人でも、日本にいても、一人の人間として尊重されなければならないとの思いを強くしました。

同じグループの方にいろいろな現状をお聞きできたのも有意義でした。最後の質問者さんへのお答えで、学校の中で保健室の先生や校長先生、教頭先生と話してみるというのは、本当に良いアイデアですね。漠然とですが、私も、今後身近な子ども達の日本語に関わりたいと思いました。ありがとうございました。

表現が間違っているかもしれませんが、「外国にルーツのある子どもも日本人児童生徒の目標と同じ物差しの上のったカリキュラムで学習していく」ということをおっしゃったのが印象に残っています。そのためには日本語指導と学校、ほかにも先生の資料にあった他の2つのアプローチを組み合わせる方が大切だと思います。ただ、公立の小中学校で日本語指導をしていると、現実的には、日本語指導と在籍級での学習はそれぞれに進んでいっていると思います。在籍級で学んでいることを関連づけた日本語指導を心がけても、それは学校のカリキュラムとしての目標を達成するためのアプローチの役割を果たしてはいない気がしました。今、私にできることは、在籍級の先生に日本語指導でやっていることを伝える、そして在籍級の活動について情報を得ることを続けていくことだと感じました。また、学校のカリキュラムについて勉強してみたいです。「保健だより」みたいな情報発信も挑戦してみたいです。

外国ルーツの子どもを取り巻く環境について、様々な視点から考えることの大切さを改めて感じました。南浦先生のお話を聞き、自分で全てやろうとしてもそれはできないし、やはりいろいろな人や機関と連携して、多角的な視点で子どもたちを見る必要があると思いました。自分はそれができているかなと振り返ることもできました。今後も外国ルーツの子どもたちと関わっていきたく思っているの、少しでも彼らの未来が明るく、笑顔溢れるものになるよう伴走者として支援者として子どもと一緒に成長できるよう邁進していきたいです。

南浦先生、この度はありがとうございました。事例を読んで参加しました。話し合いの際の共通理解があり、課題が共有できてよかったと思います。一緒に話をしたみなさまの中には、実際に現場の状況と取らし合わせると、そう簡単にはうまくいかない、と捉えていらっしゃる方もおりました。限られた時間でしたので、実際は難しいと思いますが、直接南浦先生と議論できる時間もあれば、さらに深められたかもしれないと感じました。外国につながる子どもたちへの課題は、さまざまな連携が必要だと思っています。それぞれの立場を考慮しながらも対話を重ね、一人ひとりにあった対応・教育ができるようにするためにも、連携が進んでいくよう、自分に何ができるのかを模索していきたいと思っています。

盛りだくさんの検討内容で誠にありがとうございます。とても勉強になりました。ある特定の子どもに対して、具体的にどのような支援をすればよいか（授業論、支援論）の話では「カリキュラムでは子どもをどう育てるかという視点は学校が考える文化ができていない」というお話があったかと思いますが、まさに日本語教育においても同じような状況があるかと思っています。Can-Do云々、文科省の規定云々などで、カリキュラムを規定にはめるような作業で精いっぱい、「このカリキュラムで学生は何ができるようになるだろう... 学生はこれから生活していく中で何ができるだろう...」という視点はなかなか持っていなくて、学生がどんな人に成長してほしいか、見えていないと感じています。そもそも規定は何のために...という素朴な疑問にもなりますが...なんだか本末転倒な感じがします。また、本職の日本語学校の生活クラスでは、いまになっても、学校ではどのような学習をしていて、どんな風に学生を成長させてほしいか、まったく見えていない「外野」にすぎません。日本語だけ教えてよいか、教科の勉強はそれでできるか、常に思っています。しかし、① 学校の外国の子どもの受け入れの現状は何なのか ② 学校と外部の日本語学校などの提携というのはあり得るだろうか等、子どものためのシステムはどのくらいできているか、知りたかったです。学校にいる子どもたちは、国籍によっては日本語支援の受け方も異なってくるのではないかと感じています。当校のクラスは別途料金が発生していて、家族の支援があるからこそ、受講できる、いわゆる「金による特権」という面もありますので、コラムの中で書かれているベトナムの学生には到底「大変そう」な支援になるかと考えられます。経済による格差、日本の教育制度で埋められるか、も知りたかったです。今回の検討は、「外野」との連携をあまり触れていなかったのもう少し勉強したいと思いました。学校の取り組みをたくさん知ることができて良かったです。ありがとうございました！

先日はお忙しい中お話を伺う機会をいただき、ありがとうございました。参加者のみなさんとお話しできたことも大変いい経験になりました。事前に送っていただいた読み物も大変勉強になりました。今後も折に触れ読み直したいと思っております。私自身はまだ子供に教えるという経験をしておらず、留学生対象の日本語教育を主としていますが、そちらでも必要な考え方など感じる部分は少なくありませんでした。

先日の会で参加者の方と話した時にはやはり学校に所属している先生方と日本語を教える人の交流が少ない、交流が難しい、ということが一番大きな問題になっていました。(私自身は経験のなさから実感のないことでしたので、大変勉強になりました。)最後に南浦先生がお話くださった、外堀から(保健室の先生のお話です)埋めていく方法もあると聞き、そんな方法もあるのかとびっくりしました。現在実際に学校に赴いている先生にとって、実践可能なとてもいいアドバイスだったのではないかと思います。私も今後学校に関われる機会が作れたら試してみたい手はないなと思いました。

そしてやはり学校全体が考えていかなければならないことなので、学校の成功体験をもっともっと学校間で共有して広めていってくれたらいいのになぁとも思いました。日本全体で、となればよいのですが…。

私はまだまだ子供の教育環境について勉強を始めたばかりですが、今後どのように自分が働きかけていけるか考えていきたいと思っております。

感想をお送りするのが遅くなり申し訳ありませんでした。南浦先生のご活躍を心よりお祈りいたします。先生のセミナーや講演会等々参加させていただきたいと思っております。またどうぞよろしく願います。